

2015年12月11日開催の例会にて、クラウディオ・モンテヴェルディ生誕450年4カ年計画、オペラシリーズ第1弾《オルフェーオ》に関する講義を行った。現存するモンテヴェルディのオペラは、この《オルフェーオ》の他、晩年の《ウリッセの帰郷》、《ポッペアの戴冠》の3作のみである。今回は予定されている3回シリーズの初回であった。

講義は、モンテヴェルディの生涯、オペラ誕生の歴史、オペラの詩の構造について、《オルフェーオ》の上演状況と作品内容、そして初演の場所として有力な「鏡の間」の現地取材報告という流れで進めた。以下、その抜粋報告である（なお、「オペラ」という名称が市民権を得るのは後のことであるが、講義中と同様、本レポートでも使用する）。

モンテヴェルディは3つの都市でその生涯を過ごしている。1567年に北イタリアの小都市クレモーナに生まれ、10歳ごろより音楽の教育を受けた。1590年頃、芸術庇護においては当時有数の都市であったマントヴァのゴンザーガ家で初めて音楽家として職を得る（参考：図1）。ヴィオール奏者として仕えたのち、1601年頃、34歳のときに宮廷楽長に昇進する。1612年にその職を突然解雇されるが、その1年後、45歳の時に東西文化の要、海の都ヴェネツィア共和国のサン・マルコ大聖堂の楽長、つまりは実質ヨーロッパの音楽家の地位を得、1643年76歳で没するまでその職を全うする。



図1：マントヴァのドゥカーレ宮殿（2015年筆者撮影）

音楽寓話劇《オルフェーオ》は、モンテヴェルディがマントヴァの宮廷楽長として手掛けた、彼の最初のオペラであり、1607年2月24日に上演された。音楽を演劇に採り入れることは16世紀の後半からフィレンツェやフェッラーラで実験的に行われていた。現存する最古のオペラは、1600年10月6日にフィレンツェにて執り行われた、フランス王アンリ4世とメディチ家の公女マリーアの結婚式にて上演された《エウリディーチェ》とされている。台本はリヌッチーニ、作曲はペーリとカッチーニであり、いずれも当時メディチの宮廷で活躍していた芸術家である。そもそも北イタリアの宮廷では華やかな舞踏や演劇などの舞台芸術は、ことあるごとに行われていた。宮廷には音楽家も多数雇われており、声楽も器楽も教養ある君主たちの趣味であり娯楽となっていた。それらが同一の舞台にてひとつの作品として結実したのがオペラであるが、その誕生は、古代のギリシア悲劇を復興しようとするある知識人集団（カメラータ・フィオレンティーナ）の議論から起こった。古代復興に目を向けた「ルネサンス」はフィレンツェに始まったものであり、その最後の大きな果実ともいえるオペラもやはりフィレンツェが生み出していた（音楽史における時代区分は一般のそれとは異なり、1600年がルネサンスとバロックとの境とされる）。だが、《エウリディーチェ》は、上演様式をとっていたものの、簡素な音楽に合わせたいわば朗唱劇であった。それに対し《オルフェーオ》は、効果的かつ多彩な音楽の使用で聞き手の心に届く表現豊かな演劇として評価され、オペラジャンルにおいて最初の傑作と言われる。

上演のきっかけは、1600年のフィレンツェにおける《エウリディーチェ》の評判に触発されたゴンザーガ家の公子たちの舞台芸術への関心が高まったこととされている。このとき、ヴィンチェンツォ公のお供としてモンテヴェルディも同行していたという説もある。1606年の秋ごろ、宮廷楽長であったモンテヴェルディは作曲を命じられ、台本作家には、やはりゴンザーガ家に勤めていた宮廷書記で詩人のアレサンドロ・ストリッジョ（父は同名の音楽家）が指名された。《オルフェオ》の上演では、長男の公子フランチェスコが企画・上演の管理、つまり全体をコーディネートしていたものと思われる。そして次男のフェルディナンド（ちょうどピサ大学に通っており、トスカーナ大公国領であったピサに一時的に宮廷を置いていたメディチ家に入り込んでいた）は、自ら詩や音楽を創作するほど芸術に造詣が深く、このとき兄をサポートしていた。例えば、二人が歌手の手配に奔走した書簡が残されている。メディチ家のカストラートのレンタルをトスカーナ大公フェルディナンド1世に依頼したのである。これが1607年1月初旬のことであるが、実際にこの歌手がマントヴァにやってきたのは2月16日であった。上演予定日の8日前であり、フランチェスコがいつ到着するのかと状況を尋ねる焦った様子が書簡から伝わり、非常に興味深い。また、フランチェスコが代表を務めていた、アカデミア・デッリ・インヴァギーティという、マントヴァ宮廷のために演劇やその他舞台上演を担っていた芸術家集団も関わっていたと思われる。

こうして2月24日、マントヴァ宮廷内の一室にて上演は行われた。このとき参列者のために台本が印刷されており、現存している（参考：図2）。当時の台本は現在でいう字幕の代わりであった。ここで、オルフェオの物語を振り返っておこう。蛇の毒牙により命を落とした花嫁エウリディーチェを取り戻すため、オルフェオは冥府へ下ることを決意する。音楽の力で冥府の神プルトーネと妻プロセルピナの同情を得ることに成功し、地上に戻るまで振り向かないという条件で花嫁を返してもらえることになるが、オルフェオは不安のあまり条件を守れず、目的が叶わぬまま一人地上に戻ってくる。失意のオルフェオは、周囲のバッカスの巫女たちに暴言をはき、最後には彼女たちに八つ裂きにされてしまう。というのが神話の結末であり、実際に初演時の台本もその悲劇的結末を暗示するものとなっている。当時のオペラを含めた劇作品では、ハッピーエンドを迎えることが半ば当然であった。というのも、例えば、たびたび引き合いに出している1600年の《エウリディーチェ》は、結婚式の祝典で上演されたものであったため、エウリディーチェが無事に帰還して、花嫁花婿が幸せになる様子を描く必要があった。一方、マントヴァでの《オルフェオ》は、特別な機会のためではなく、年行事である謝肉祭の時季に行われた私的な娯楽だったため、強引に筋を変更する必要はなかったのであろう。しかし、後に出版されたスコア（1609年、1615年再版）は、オルフェオの父である太陽神アポロが失意の息子を天上に迎えるという、現在にもよく知られる結末を加筆修正したものになっている。

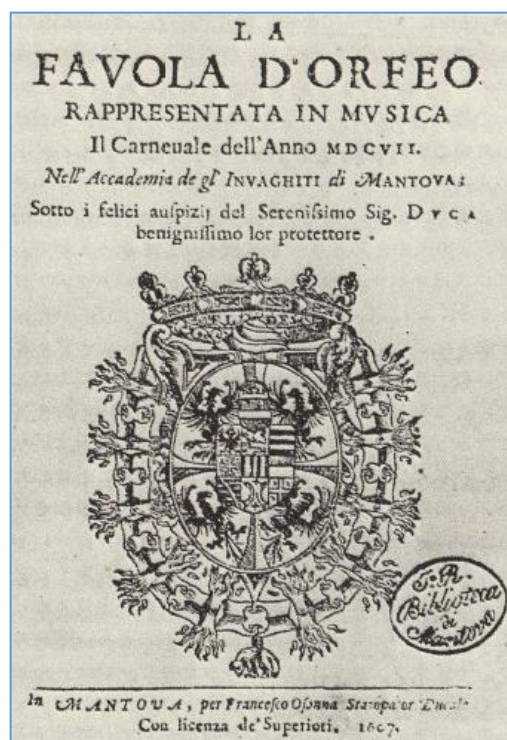


図2：1607年2月24日配布の台本
フロントページ



図3：修復後の「鏡の間」。ファウニの回廊側からの様子。
(2015年筆者撮影)

さて、《オルフェーオ》は「マントヴァ宮廷内の一室」で上演されたと言われるが、該当する一室「初演の場所」は、これまでも研究者の間で議論されてきたが、いまだに明らかになっていない。文献によっては上述したアカデミア・デッリ・インヴァギーティの劇場がそうであるという説も挙げられているが、そもそもこのアカデミアが専用の劇場を持っていたかどうかは不明であり、現在では宮廷内説が主流である。一人の列席者の書簡から、「フェッラーラの高貴なるご婦人が過ごしていた一室」（ヴィンチェンツォ公の妹でフェッラーラに嫁いだマルゲリータを指している）という証言と、モンテヴェルディの1609年の出版譜内の献辞文から「狭い舞台で」上演されたという証言があるが、これらのみでは到底特定できない。一方でヴィンチェンツォ1世の時代、日常的に音楽を楽しんでいた「鏡の間（音楽の間）」があったことは、モンテヴェルディの書簡の記述から長きにわたって知られてきた。よってこの広間が、「公女マルゲリータがかつて使用していた、狭い舞台が設置された一室」なのではないかと

ささやかれてきた。この「鏡の間」も正確な場所は特定されていなかった（度重なる改築ですでに存在しないとされていた）のだが、20世紀末に当時の設計図が発見された幸運を機に、音楽学者ブゼッティと建築家ソッジャとの共同研究によって、場所が特定され話題となった。発見当初はいくつかに分断され原型をとどめていなかったものの、数年の修復作業ののちに一部を除いて元の姿を取り戻し一般公開も始まった。その場所とは、旧館から宮廷内礼拝堂サンタ・バルバラに通じる通路（ファウニの回廊）と八角形の中庭（オット・フェリーチェ）に接する、細長いいびつな台形のスペースである。この回廊から入室できるのだが、その正面にも扉がある。出入り口のある2辺以外の2辺は、外に面しているため、窓が多くて明るい。残念なことに、部屋の1/4ほどのスペースが階段として改築されており、この部分だけは修復不可能らしく、したがって冷たいグレーの壁が部屋の片隅を抉り取ってしまっている。また、発見時には梁がむき出しだった天井には、半分だけ設計図通り、中央の円から各窓の上方に描かれている半円形のフレスコ画を覆うように湾曲する、数本のヴォールトが（パネルではあるが）再現されている。そしてこの中央の円に「鏡」がはめ込まれていたということだ（参考：図3）。この広間が《オルフェーオ》初演の間であると確定はできないものの¹、当時の音楽の実践状況を想像させてくれる、感慨深いスペースである。

¹ この場所は《オルフェーオ》の初演場所ではないと、発見者であるブゼッティより後に否定された（2017年3月追記）

モンテヴェルディはこの5年後、マントヴァを去り、さらに1年後にはヴェネーツィアにいる。周知のとおり、このヴェネーツィアにオペラが導入されるのは1637年まで待たねばならない。従来のオペラ史ではこの年以降のヴェネーツィアの姿しか語られないが、オペラシリーズ第2弾では、1637年までのヴェネーツィア社会と文化にアプローチし、オペラ導入までの足跡を追い、モンテヴェルディ初の公開オペラ《ウリッセの帰郷》に迫りたい。

萩原 里香

日本イタリア古楽協会会報（2015年度）掲載の例会報告の原稿